

S F 的 読 き 解 き

子 ども と い う 風 景

第 九 回 忘 却 と い う 贈 物

堀 内 守

忘 却 と は

「あ の 頃 の こ と」と い っ て も、 あ な た は お ぼ え て い な い
で し ょ う ね。 お ぼ え て い な く て も い い の で す。 い や、 い
ち い ち お ぼ え て い た ら 大 変。 神 経 の 負 担 が 多 く な り、 そ
れ だ け で 動 き が と れ な く な る に 違 い あ り ま せ ン。

あ な た が 忘 れ て し ま っ て い る と い う の は 天 の 配 剤 か も

し れ ま せ ン。

そ う で す ね。 あ な た が 私 た ち の 保 育 園 に 入 っ た 頃 か ら
書 き は じ め ま し ょ う か。

あ な た は 数 日 間、 門 の と こ ろ で お 母 さ ん と 別 れ る の が
い や だ と 言 っ て、 大 声 で 泣 き わ め き ま し た。 大 き な 声、
額 の 静 脈 を 浮 き あ が ら せ、 汗 を か い て。 私 が 抱 き あ げ
て、「じ ゃ あ、 お 母 さ ん に バ イ バ イ し ょ う ね。」 な ど と あ

やしても泣き止まなかった。他の保母さんたちも、あなたのこの様子を見て、「あら、本園の記録破りだわ」と言ったくらい。なぜなら、ふつうはどんな子どもでも、三日か四日で大体慣れ、親と機嫌よく「バイバイ」をやるのに、あなたは一週間たってもまだぐずぐずしていたからです。三歳児といっても、早生まれのあなたは満二歳になっていなかったからでしょう。

この頃の記憶はだれにもありません。それでかえってよいのです。なにしろおぼえることがいろいろあつて、余分なことは片端から忘れないと、カンジンなことの編集ができないからです。

保育園の生活に「慣れる」という意味だつて一様ではありません。朝、定刻に出かけてくる。これだけでも大変。着替え、洗面、用便、食事、出発の支度……。

この頃のあなたは、そういう複雑な仕事の「手順」も順序もわからない。だから、横にいますお母さんが手取り足とりして教えずにはならなかった。こういう平板な記述では事態の何百分の一しか伝えていないような苛立

ちも感じます。

着替えること。これだけ取りあげても、事はかなり複雑です。てきばきとやるとはどうてい考えられませんか。ボタンを外したり、はめたりするだけでも時間を要します。まわりの人はそれをていねいに教え、あるいはじつと見守つてやらねばならない。何度教えてもできないということもあつたに違いない。あるていどやれるようになってからも、子どものあなたは途中でボンヤリしてしまつて、お母さんを苛々させたことでしょう。

あなたの忘却の力、すばらしい。なぜなら、この間に、あなたのお母さんやお父さんをよく怒らせ、嘆かせたからです。

早く早く

あなたのお母さんは、この時期あなたに向かって何回となく「早く早く」とか「急いで急いで」と声をかけたことでしょう。うまくできないあなたに向かって「次はこれをやるのですよ」と「順序」をいちいち指示し、そ

の行動を促し、わき見をするのをやめさせ、気紛れのあなたを一定方向に向かせる。それをこの簡単なことばで命じるのです。そしてそれでもうまくいかないと、半分嘆き声をまじえて「何やってるの！」と声を高めたに違いありません。

そう言われたのはあなたです。

しかし、この場合、「あなた」とはどういうこと、でしょうか。確かに名前をもった一人の人間です。が、形成途上の人間、いまだ自分のことを自分でやることのできない存在です。責任がとれない存在です。だから「早く早く」と言われたところで、その期待どおりにやれることはない。あなたのまわりの人びともそれを承知の上でなお「早く早く」と急かしたというのが真相です。ついでながら、いくら早く早くと何回もおっしゃったとしても、あなたのお母さんが例外的にきびしかったということにはなりません。

ついでだから書きそえておきます。私はある時、保育園PTAの際に、「お母さん方は子どもに向かつて一日

に何回ぐらい『早く早く』とおっしゃいますか」と訊ねてみたことがあります。その時、皆さんはたがいに顔を見合わせて、「そーねえ、3回ぐらいかしら」とか「私は5回ぐらい」というように、ヨソ行キの答をお出しになりました。まさにヨソ行キのキレイゴト。ホントはこんなものじゃない。その倍になんなんとする回数なのですよ。しかも、これが子どもが十歳を過ぎてまだまだ続く――。

でも、決してこれを私は非難しようとは思いません。むしろ逆なのです。それでもしないと、行動の「手順」や「順序」は体得されない。忍耐と苛々ととまどいのごっちゃになって、やっとなことさという形で。この始終をていねいに見てきた私は、この、いかにもナマナましい(ヨソ行キでない、キレイゴトでない)実態を重視したいのです。

でも、あなたはこの経過は全然おぼえていないでしょう。そして、当事者の一人だったあなたのお母さんもそのことをケロリと忘れてしまっておられるはずです。幼

児期から少年期へと移るこの間に生起する右のようなドラマ（私はあえてドラマといたいです）は大らかな微笑みを誘います。

汗を流して「早く早く」とあなたを急⁺きたてていたあなたのお母さんも、いまはその頃のことを口になさらないでしょう。結構なことです。ああ、すばらしき哉。忘却よ。

でも、この忘却は平板に受けとめてはなりませんよ。全部消え去ったではありませんよ。

あなたがある行動をするにあたって、手順やコツや要領を体得（身につける）できたから、そのおぼえる途中のことどもは忘れてもいいのですよ。

家を建てるときの足場のようなもの。家が完成すれば、足場はとり外される。そして足場を組んだこと、足場を頼りにしたことを忘れてもいい。まあ、こんなたとえで考えることもできますね。

子どもの演技

あなたは保育園に慣れるのに時間がかかりました。下駄箱にはきものを入れ、カバンを外し、中から連絡帳を出し、お手ふきを出して所定の場所に掛けるのにもいつもうろろう。それができて他の子どものように自由時間に庭で遊ぶということをやらないでいた。椅子にすわってぼんやりとしている。

行動がのろかった。でも、私たちはあなたに向かって「ゆっくりでもいいのよ」といって励まし、認めてやることに心をくだいていました。ふしぎなことに、そういう承認があなたを勇気づけ、あなたに張りを与えはじめたのです。

あなたは私の期待した以上に良い子ぶりを発揮し出しました。

他の子との競争もはじめました。あまりにも保育園で演技をやり過ぎるものだから、お家へ帰るとヘトヘト。結局、お家の中では以前と同様の「甘ったれ」だったようです。

この二つの世界をくらべてみると面白いですね。保

「育園」は、あなたにとって「晴」の場所。実力以上の演技ができる場所だった。これに対し、家は、本来のあなたが憩う場所だった。

保育の先生たちは、時折、こういう子どもの演技をそのまま認めています。つまり、「ああ、少し無理をしておこなっているな」と思っても、「演技だ」とは言いません。そう言ってしまったらすべてオジャマンになってしまいますもの。

保育園の生活で子どもの個人差がいちばんよく出るのが食事と用便という二つの場面です。そして、おわかりのように、この二つの場面は、保育園において決定的に重要な訓練に属するのです。

食事とは、ここにおいて何というさまざまなレベルのとまどいを見せるものでしょうか。ある子は箸を全然使えない。箸をもつことができない。まるでチンパンジーでさえ、こんなつかみ方をしまいと思われるほどおかしなつかみ方をする。そして、よく箸を床に落としてしまふ。手づかみで食べる方がはるかに「器用」な子がいる。

る。焼きそばの冷たくなったのを左手で器用に口へ運び、口のまわりをみごとに汚しながら食べる。食べるといっても、ゆっくり噛むなどは考えもしない。とにかく食う。食らう。摂取する。

早い子、遅い子がみごとに出てくる。

でもね。この段階でいくら遅くとも私たちは全然心配してはいません。だって、昼食は四十分もかかって、ぼんやりしていたあなたが小学校の高学年になるや「早食い」とアダ名がつくくらいに「成長」したのですから。

あなたは私たちの見通しに自信を与えてくれたわけですから。

トイレット・トレーニング

さて、これからは一般論で言いまししょうね。

どの子も一度や二度、トイレで失敗しています。保育園でいう「オモラン」です。これにも大から小までの幅があります。定時に用便を済ませること。このことがなかなかうまくいかないのが幼児です。身体のリズムが違

うからか、生活のリズムの違いによるのか。

ともあれ、保育園では着替え用の下着をたくさん用意しています。これのお世話になる者が多いのですよ。所
知らず、時知らずというくらいです。

人間が排泄ということを自分でやれるようになることは大変な訓練の結果です。そして、それがきちんとやれるようになると、行動のパターンも変わる。

こんな形で行動が活発になり、行動範囲も広くなるのです。オムツが外せ、さらに定期的に自分をコントロール

ルできるから。

殊によると、私たちが「人格」と呼んでいるものはトイレット・トレーニングあたりから始まるのではないのでしょうか。老いた人の世話をしながらつねに心に浮かぶのが右のような感想です。

あなたが「オモラシ」をしたかどうか。はっきりとは申しあげないでおきます。可能性は大です。しかし、だれがああなたの失敗の世話をしたかは申しあげない方がいい。なぜなら、いま成人したあなたが、その昔だれそれ



に「オモラシ」の際世話をしてもらったというようなことがわかったとして、あまり気分はよくないでしょうから。こういうことはこっそりとしておくのが正しいのです。

でも、あなたはその頃のことをおぼえておられない。だからいいのです。もし、記憶がはっきりしていたらあなたは気軽に外を歩けないでしょうから。

だれも似たような失敗があった。それが普遍的だから、忘れるということが必要なのですよ。「オモラシ」をしたからといって、だれもそのことを記憶に残さない。ありがたいことですね。だからこんなことを書いてもいられる。

ふしぎにも、微笑ましいのは、保育園のトイレの小さなこと。戸をへだてて用便をしながら、たがいに話していたり、歌をうたっていたりする子もいました。あなたはさしずめその筆頭で、大きな声で歌をうたいながら「まだ出ない」などと言っていましたっけ。

折ること

折り紙は楽しい。あなたは折り紙が得意じゃなかった。「折る」という平板な作業でも、子どもにとっては複雑な工程の組み合わせです。あなたは「折る」。しかし、人さし指や中指を使って、ていねいに折り線をなぞることがうまくなかった。指の腹で押さえこむコツがわからなかったのでしょうか。だから、あなたの折ったツルはどこかぶくぶくふくらんでいたし、あなたが折った箱はいびつだった。それなのにあなたは折り紙をよくやっていた。ハサミが使えるようになると、切り紙をやっていた。子どもの器用さというものがこんな形であらわれるものかということをよく教えられた感じでしたよ。

いまでも紙をくるくるとまわしながらハサミである形をつくり出して得意になっていたあなたの顔が思い浮かびます。

鉄棒

砂場の近くにあった鉄棒にぶらさがっていて、あなた

はドシンとしりもちをついたことがあった。大変なことでした。うまく落ちないで、手首の骨がおかしくなりました。医者につれていき、白いホータイをしてもらって保育園へ戻ってきたら仲間があなたを取り囲んで白いホータイをじっと見つめている。

あなたはその時「ヒーロー」だった。

衆目を集め、みんなから心配され、気をつかってもらい、それまでにない経験をしたからである。

ケガがなおったときからあなたは鉄棒をコワがらなくなりました。それは私たちの予想とは反対でした。恐らくあなたがもう少しのあいだは鉄棒をコワがるに違いないというのが私たちの共通の見方でした。ところが反対でした。あなたは私たちの予想をくつがえし、サカ上がりや軽々とやってのけました。

鉄棒でも跳び箱でもそうですが、あれらを上手にやれるようになるまでには、恐怖心をなくすという前段階が必要なのです。そのことをあなたから教わることでしました。だから、いまでもあの小さなプールに入るの

にもコワがる子がいますが、そのとき水をコワがるのをどうやってなくすかに心をくばっています。

コワがらなくなったらあとはスイスイといきます。コワイという感情が全身をかたくしてしまふのですね。

歌うこと

こんなことを書きつらねているうちに、あなたがほとんど忘れてしまっておられることどもが次から次へと浮かびあがってきます。

先ほどあなたがトイレで大きな声でうたっていたと記しました。しかし、あなたはみんなといっしょにうたうときにはあんなに大きな声が出なかったのです。小さな口をあけてワントンポ遅れていくようでした。

毎日保育園では何回か歌をうたいます。朝も、帰りの時も。それぞれは、ある心的な準備のしるしだったので。そういうときにはあなたの声は大きく出ました。けれども、そういう実用的な目的から離れた歌を学ぶ段になると、あなたは急に消極的になってしまって、見てい

ても別人のように思えました。

なぜだったのでしょうかね。

朝、みんなが登園します。そしてしばらくのあいだは自由時間です。そのとき部屋に入れというためのしるしとして、この保育園ではずっと同じメロディを流していました。何だったか、ご記憶に残っていますか。殊によると、何回も耳にしたはずなのに、そのメロディすら忘れてしまったとお答えになるかもしれませんね。ともあれ、このメロディがかけられると、あなたは（外に出るのをいやがっていた頃のこと）まっ先に椅子に腰をおろし、他の子どもが外から急いで入ってくるのを待っていました。あの「待ち」の姿勢は、きっと消極的というよりも、先を「読む」ことの子どものらしい対応だったのかもしれませんね。

メロディが流れる。とたんに、あなたが身ぶり手ぶりよろしく遊戯の形で応ずるようになったのはもう少ししてからです。のびやかにできてきてからです。

遊戯というものがメロディと身ぶり手ぶりを結びつけ

るきっかけとなったのでしょうかね。

さあ、その最初の遊戯は何だったか、おぼえておられますでしょうか。

そうですね。「むすんで ひらいて」です。

遊戯

これを私は最初の頃教えました。まだ小さかったあなた方に。自分でやってみせながら口でうたい、口でうたいたながら手を叩いたりして。そのときの小さな手のかわいかったこと。手を叩くときの音のかわいかったこと。輪になってぐるぐるまわるとき、男の子も女の子もリズムに乗っていました。どの辺でやめようかと問うても、「まだまだ」といって、くりかえし、くりかえしやりたいと主張したあなたの顔と顔。

遊戯をいくつもやれるようになる、あなたたちはお家に帰ってからそれを披露してみせたようです。そういうチャンスもふえたのです。その結果、あなた方はいつのまにか保育園と家結びつけるメッセンジャーのはた

らぎもするようになりしました。「お便り帳」にお家の方からの通信がふえはじめました。

こういう記録は残っているかもしれないね。そして記憶のないところを補ってくれ、あなたの「過去」の一部を再現させてくれることでしょう。いろいろなことがあったあなたは思い出されるはずですよ。とはいっても、それはすべてを再現してはくれません。一部である場合もあります。

しかし、そういう思い出は、他面で、今日のあなたとつながっているのです。あなたの拡がりも深みも、こういう異世界（もうそう呼んでもいいまでにあなたは成長した）と接触して見ることはじめて明らかになるようですよ。

SFのテーマに「ファースト・コンタクト」というのがあります。また「タイム・マシン」に乗って、自分の「ルーツ」をさぐるというテーマもあります。いずれも異文化、異世界との接触を示していますが、子どもという風景との接触もそれと同じです。毎日慣れている風景

はさして私たちの関心を惹きつけないでしょうが、時にはこういう「接触」や「交流」を試みても面白いことです。それは遊戯かもしれません。しかし、遊戯なればこそ、できあいの物の見方を超えるきっかけを与えてくれるに違いありません。

「子どもという風景」は、そういう契機のことなのですから。

(名古屋大学)